



TITLE:

# 明代チベットの八大教王について (下)

AUTHOR(S):

佐藤, 長

---

CITATION:

佐藤, 長. 明代チベットの八大教王について (下). 東洋史研究 1964, 22(4): 488-503

ISSUE DATE:

1964-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152652>

RIGHT:

# 明代チベットの八大教主について〔下〕

佐藤 長

〔略語表追加〕

元末明初—佐藤長「元末明初のチベット状態」明代滿蒙史研究所  
收、京都、昭和三十八年。

REB=Rolf A. Stein, *Recherches sur l'épopée et la barde au  
Tibet*, Paris, 1956.

IT=Giuseppe Tucci, *Indo-Tibetica*, IV, Rome, 1941.

## 一 二

とにかくタシラグバは父ガーギワンチュを失った一四  
九一年には四歳であり、ガーギはこのことを非常に氣にか  
けながら世を去った。そこでその後見者が考えられたが、  
それについてダライ佛教史は次のごとくいう (TPS, p.

640)'

チエンガ・チョエキラグ *Spyan sñā Chos kyi grags* は

太子が成長し、デシの職をとるまで、テル *Thel* 及びジ  
エタンの大臣、高職者とともに命を發し、官職を任ずる  
權威をもて、テルのチエンガの重任を負うことを承諾せ  
り。

チョエキラグはダライ佛教史ではここに突然現れてくる  
で理解し難いが、トウツチ氏は系圖の中で、リンチェンド  
ルジュの子とし、ガーギワンチュの兄弟と見ている。しか  
しガーギがリンチェンの子でなくて、ラグパジュンネーの  
子であることは先に述べた。然らばチョエキラグバのみは  
確にリンチェンの子であろうか。このことを明かにするに  
はやはりマルボ史を先ず検討しなければならない。

第一に (DMS, p. 70b)'

〔ガーギワンチュは〕ヘル・チョエキラグバ帝師 *Dpal*

*Chos kyī grags pa ti grñi* に依りて大乘の法典を數多  
聽聞したり。

とあるのは、確に同一人物を指すと思われるが、これによつて彼はガーギの師に當るような優れた人物であることが推定される。第二にガーギが死んだときのこととして、パグモドウの有力者等が集り (*DMS. p. 71a*)

活佛寶者 *Sprul sku rin po che* の御考慮を願ひ、後見として宗家寶者 *Gaṇḥ rgyud rin po che* (|| タシーラ

グバ) の成長するまで、彼等は援助する方法をとれり。というが、ダライ佛教史と比較して明かにこの活佛寶者はチヨエキラグバである。而して癸丑の年(一四九三)には法主活佛 *Chos rje sprul sku* がテルのチェンガに任ぜられたことをいうが (*DMS. p. 71a*)、これ亦前者と同一人であることはまちがいない。更に甲申の年(一五二四)にかけて、

ヤンバチエン *Yaṅs pa can* においてチエンガリンポチ  
ユは御年七十二歳にて僧院に靜けく逝きたまいぬ。

とあるのも同一人と見て差支えなく、これによつてチヨエキラグバは一四五三年の生れであることを確認することが

できる。一四五三年というと既にドルジェリンチエンは歿しているのであるから、トゥッチ氏のように、前者を後者の子とすることは全く成立しない。或はガーギの弟とすることも考えられないではないが、やはりその父のラグバジュンネーは一四四五年に歿しているので關係はない。結局チヨエキラグバはその頃のバグモドウ王家とは血統の關係のない別派の人物であらうということになるが、然らば果して他の何人に當るのであらうか。

この問題を解くために、我々は先ずテルのチェンガの系統を一應辿らなければならぬ。ポティセルウIIの間答第十三には、各代のチェンガの在位年數を掲げているが、それによれば (*PTSR. II. p. 54*)

ツェニーバ *Tshes gñis pa* は三十八年、それよりシャマルチヨエバンチエン *Shwa dmar cod pan can*、チェンガ・ラグジュン二世 *Grags hbyun phyi ma* なり。

とある。ツェニーバはいうまでもなくガーギワンチュ、チエンガ・ラグジュン二世はダライ佛教史にタシーラグバの第二子として出てくるチェンガ・ラグジュンバ(|| ラグバジュンネー)に相違ないが、その間には明かにシャマルバ

の管長シャマルチョエバンが数えられているのである。ケーパーガトンにもテルの座主の在位年数を列記したところには最後に (PT. p. 409)。

ニエルニーリンボチェ Ner gñis rin po che ソエナムギエンツェンは十八年、その間聖者は多く出で、後にシャルチョエバンジンバ四世 Shwa dmar cod pan hdsin pa bshi pa は座主を暫く勤めたりしが、大概はラン・ラーシグ氏の一族が座主そのもの又は代理を勤め、その系統は絶えざりき。

とあってシャマルバ第四代が存在したことを示している。シャマルバはシャナグバ同様、代々轉生活佛によって法統を嗣ぐから、チョエキラグバがマルボ史で「活佛賢者」と呼ばれた原因はここに至って遂に氷解する。

シャマルバ第四世の名は普通にはチョエラグイシー Chos grags ye ces であるから、チョエキラグバは正にこの名の前半を寫したものとしなければならぬ。第四世については、ケーパーガトンはカルマバ大ラマの傳記のうちにも詳細に述べているから<sup>①</sup>、それを参照すると、

御年二十四歳丙申の年 (一四七六) にはガンデンマモ

Dgah Idan ma mo より出發し、ダグボ Dwags po' オルカ Olkha を通り、デンサテルとツォンドエラツカ Tshon hdsu brag kha 等に至りたまひぬ。前にコンボにおいて會われたる尊者イサンジエバ Yid bzari tse pa と尊者等御二人にラーシグラン氏の帝師 Ti gñi とされ、主人として奉仕の厚禮を受け、チェンガリンボチェ (|| ガーギワンチュ) は敬禮を大に盡したまえり (PT. p. 594)。

癸丑の年 (一四九三) 二月には……デシ・バグモドゥバの高官等は、ロゴンリンボチェ Hgro mgon rin po che (|| 開祖バグモドゥバ) の牀座 gdan sa に至りて、その一族の兩派 (テルとツェタン) の保護者となられんことを願ひたり……「よって彼は」大デンサの牀座に就かんことを諾いて、後高御座に至り、デシ・バグモドゥバの兩派の首誦者 dbu ldon となれり (PT. p. 603)。

御年七十二歳猿の年 (甲申、一五二四) 十一月二十五日に御心を普く憂より解きたまえり (|| 涅槃に入りたまえり) (PT. p. 611)。

とあって、先に確定した年代、事實と全く一致する。

シャマルパには、活動的で政治的野心の多い活佛が輩出したが、この第四世もその例に漏れなかった。當時バグモドゥバ王朝の下で最も勢力のあったのはリンブンパ Rgya-spuis pa の諸侯であるが、一四八一年にリンブンパは中央チベットにおけるバグモドゥの權威を完全に打倒してしまった。而してこの第四代シャマルパを最もよく後援したのがリンブンパであったことは充分注意する必要がある。しかし第一等の實力者のリンブンパが如何に推薦したからとはいえ、傳統のあるデンサテルの大寺院の座主までを一時他派に委ね、王朝の後見を依頼しなければならなかったのは、もはやこの王朝が末期的症狀を呈していたことを示すものに他ならない。闡化王としてのラン氏の系統はこれより三派に分れ、昔の面影は更になく、リンブンパにその實權は奪われ、リンブンパも亦後にその家臣に支配を覆されて、チベットは再び完全分裂の時代に突入するのである。

### 一三

第五は闡教王リゴンパ Hori-gun-pa であるが、これに

關する諸問題は別稿で述べた<sup>⑨</sup>。そのうちで實は二つばかり不確實な記述を残したので、それらについてここで些か補をつけておきたい。

第一は座主の繼承で、JドルジエギエルポとLデュエルブギエルポの親子關係が甚だ無理な關係であったことである。ケーパーガトンによる我々の計算では、前者Jは一三五〇年に死し、後者は一三五七年に生れたことになるから、その間に七年の間隔があり、親子關係の設定は實は困難であった。前稿では一妻多夫制を假定して、デュエルブの實母がドルジエの死後その兄弟の何人かに嫁し生んだものとしたが、これは些か考え過ぎであった。恐らくケーパーガトンにおける「父」ドルジエギエルポはその弟ドルジエペル Rdo rje dpa'i の書寫の誤で、デュエルブはドルジエペルの子とすべきであろう。ドルジエペルの在世年代は不明であるが、兄より七年以上長く在世したと見ることは差支えなく、又俗人であったことは疑ないから子があっても何等不自然ではない。Jドルジエギエルポは座主であるから子のないのが當然であり、事實リゴンパではそれまで伯父より甥への座主の繼承が普通であつて、座主が結婚し

た例はない。座主の結婚はL・ドエルブギエルポから漸く始まるが、それには血統の斷絶のような何か止むを得ない事情が伏在していたのであらう。

とにかくドエンルブギエルポはドルジェペルの子として考えるべきであり、J・ドルジェギエルポが歿したとき、その甥等のうちで年長のK・ニエルニール *Ner ghis pa* が後を継ぎ、その死後、L・ドエンルブギエルポは四十五歳で漸くその後を繼いだのである。

第二はガンギェルの僧院の問題であるが、この寺院の歴代の僧院長については前稿では専らテブゴンによって述べた。しかしヴァイセルによると、より詳しく二三の疑問が解けるので、それをここに紹介したい。

第一の創設の問題についてはヴァイセルは次のごとくいう (VS, p. 175)。

リゴンのジダテンゴンポ *Hig rten ngon po* (＝リゴンポ) の弟子得成就者ツァンシブパ *Gtsan shib pa* は、<sup>⑤</sup> ラマの懸記せられしごとく、廣く「各處の」寺院において禪定に住せられしが、或るとき施食の器物を鷲鳥 *han pa* が持來りて北山 *Byan ri* の側に運びたるにより

*skyal bas*、空行母の懸記なりと覺り、そこに寺院を建て、名をガンギェル *Nah skyal* と稱せり。

ガンギェル寺院の因縁譚であるが、これによって、テブゴンの *Nah rgyal* は誤で、*Nah skyal* の綴字が正しいことが分る。

ヴァイセルは續いてその歴代僧院長の名を、

- 一、シャンラ *Shan bla*
- 二、ギェル *Rgyal ba*
- 三、シリ *Gzi rin*
- 四、ニエルシグ *Gñal shig pa*
- 五、ギェルワセ *Rgyal ba sen ge*
- 六、ラマセルワ *Bla ma gsal ba*
- 七、リンギェル *Rin rgyal*

の順で擧げるが、テブゴンのそれと比較すれば、<sup>⑥</sup> 五代まではテブゴンのうちにその名はなく、(六) ラマセルワはセルジュワ、(七) リンギェルはケールプリンチェンギェン

ツェンの比定が可能なのである。ヴァイセルは更に、

これよりラマ二人程ありて絶え、シャムゴンラマ *Hjam ngon bla ma* (＝ツォンカバ) の宗派に變りたり。

とあるから、ガンギェルは早くも第九代以後にはゲルグバの宗風へと變つたのである。尤も續いて、

十、チヨエギェルリンチェン

十一、リンチェンロトエ

十二、リンチェンベルサン

が擧げられ、これらはテブゴンの系統圖と一致するが、更に、

彼(リンチェンベルサン Rin chen dpal bzah)の甥によりて尊者ゲドンギヤムツォ Rje Dge hdun rgya mtsho にこの寺院は獻げられたり。

とあり、遂に寺院そのものもリンチェンベルサンの次代になって所屬をゲルグバへと變えてしまったのである。ゲドンギヤムツォはいうまでもなく所謂第二代ダライラマである。

ヴァイセルの示す僧院長の系譜は曖昧なテブゴンよりは些かましとも思われるが、結局はリゴンの座主との關係をより一層明かにする程のものではない。今は唯珍しい一つの史料として提示するに止めたいと思う。

#### 一四

第六は贊善王である。この王については明傳は、贊善王者靈藏僧也、其地在四川徼外、視烏斯藏爲近。

という。靈藏の位置については四川通志の記述が参考になる。即ち嘉慶重修四川通志卷九七、九八に四川布政司所屬の大土司を列擧して、そのうちに林葱安撫使司というのを數えているが、恐らくこれが靈藏と同一なのであろう。それによれば林葱は、南はデルゲ Sde dge に接し、北は蒙葛結に接している。ロックヒル W. W. Rockhill によれば、蒙葛結は Rje kun mdo であるから、林葱はジェクンドとデルゲの間にあることになる。前述のごとくケーパーガトンにはツァンシンワン Tsañ cin wan がリンツァン Glin tshan の僧であることをいっており(元末明初五五二頁)、そのチベット語の原形は明かになった。又スタン氏は靈藏の説明に、鄧誠がチベットに使したときの通路は罕東から靈藏を通じて必力工瓦 Hbrī gūn pa、烏思藏 Dbus gtsai (ラサ地方) と行っているのを引用しているが(Reb. p. 211)、これも靈藏が東チベットにあったこ

との傍證となるであろう。

遺憾なことにはこの宗派が如何なる系統に屬するかについてはチベット文獻には何等記載はない。唯トウツチ氏はニャン Myan (= Nan. ギャンツェ地方) の年代記であるニャンチュン Myan chun にサキヤの宮廷における四大ナンチュン Nan chen を擧げているが、その一人にリンツァン Glin tshan を数えているから (IT. IV. p. 83) これによって贊善王の系統はサキヤの一派であるということになるであろう。スタン氏も同じくトウツチ氏の記述により、このことを確認しており (REB. pp. 226, 238, n. 10) 先はこの推定は誤らないものといえるのである。

さて先に度々觸れたごとく成祖は即位すると直に僧智光をチベットに遣し有力なラマの招撫を行わせたが、智光の目的地の一つには明かにリンツァンが数えられていた(實錄洪武三十五年八月丁巳の條、史料四八頁)。その努力によつてか、永樂四年二月には館覺靈藏等處の使臣端竹藏トが來朝したが、端竹藏ト tuen tsy' tsay pu は Don grub bzai po と還元される。而して翌三月には靈藏の着思巴兒監藏 tsy' si pa z'i tci'en tsay 〱 Chos dpal rgyal mtshan

が靈藏灌頂國師を命ぜられ(史料五一頁)、次いで五年三月には彼は贊善王に封ぜられた(史料五五頁)。彼が灌頂國師になったのは遣使來朝の故であろうが、更に贊善王に封ぜられたのは、前にも述べたごとく恐らくは既に入朝していたデシンの推薦によつていたのであらう(元末明初五五二頁)。

チョエペルギエンツェンの後繼者については明傳には、洪熙元年、王(〱チョエペルギエンツェン)卒、從子喃葛監藏襲。

とあり、喃葛監藏 nam ko tci'en tsay 即ち Nam mkhah rgyal mtshan が後を繼いだごとくいう。一方實錄永樂二十年三月辛酉及び同二十一年二月乙卯の條にはともに、贊善王吉刺思巴監藏巴藏トが汝奴星吉を使として來朝させたことが見えている(史料七〇、七一頁)。吉刺思巴監藏巴藏ト tci' la si pa tci'en tsay pa tsay pu は Grags pa rgyal mtshan dpal bzai po であらうし、汝奴星吉 zü nu siŋ tci' は Gshon nu seŋ ge であらう。而してナムカギエンツェンの就任について實錄洪熙元年の條には何等對應記事は見られない。しかし後述のごとくナムカがその後を



子のペンデンギヤムツォに譲らんとしたときの詔勅にはナムカに對して（史料一四六頁）、

太宗文皇帝臨御之日……朝廷特封爾叔着思巴<sup>バ</sup>監藏爲靈藏  
灌頂國師贊善王、遠我皇考宣宗章皇帝嗣位之初、俾爾襲  
封王爵已有年矣。

とあるところを見ると、ナムカが洪熙元年に就任したことは確實である。

一方チョエベルギエンツェンは、永樂十七年十月に楊三保がチベットに使したときに往訪した大ラマの一人に數えられてゐるから（史料七〇頁）、少くとも永樂十七年までは彼は在世していたことになる。ついで二十年に遣使したのは贊善王ラグパベルサンボであるのを見ると、この間に王の交代があったと一應考えなければならぬ。しかしこのラグパの名はこのとき實錄に出てくるだけで、又事實在位したとしても洪熙元年までは僅か三年ばかりであり、果して眞實の後繼者であったのかどうか疑わしい。少くとも明側ではこれを贊善王に封じた記録はなく、従つて次の贊善王が立つまでの代行者として彼は存在したのではなかったかと思われる。臆測は種々に立てられるが、一應この間

の經緯は右のようなものであったと考えておきたい。<sup>①</sup>

ナムカギエンツェンの名が實錄に初めて現れるのは宣德二年四月辛酉の條で、太監の侯顯がこのとき往訪した相手の大ラマの一人に數えられている（史料八六頁）。贊善王はこの後喃葛監藏巴藏卜 *nam ko tien tsag pa tsag pu*（史料一〇六、一〇七、一六五頁）、喃哥兒監藏 *nam ko zī tien tsag*（史料一二二頁）、南葛監藏巴藏卜（史料一六六頁）等の名で宣德八年まで現れるが、何れもナムカギエンツェンその人であることは疑ない。

正統十年（一四四五）には贊善王はナムカの長子ペンデンギヤムツォに代えられた。即ち實錄に、正統十年六月辛亥「贊善王南葛監藏巴藏卜姪班丹監剏」に降した勅諭として（史料一六六頁）、

今爾叔奏稱、年老不能管事、爾班丹監剏乃其親姪、克承梵教、恪守毘奈、多人信服、請代其職、特允其請、命正使禪師鎖南藏卜、副使刺麻剏什班丹等、同指揮幹些兒藏卜、齎捧勅諭誥命、封爾班丹堅剏、爲靈藏灌頂國師贊善王、代爾叔掌管印章、撫治番人。

とあるが、班丹堅剏 *puan tan tien ts'uo* は *Dpal Idan*

rgya mtsho であり、鎖南藏ト suo nam tsang pu は Bsod  
 nam bzai po' 割什班丹 tsa si puan tan は Bkra gis  
 dpal ldan' 幹些兒藏ト no sie zI tsang pu は Hod zer  
 bzai po であろう。これによれば王の交代はナムカが年老  
 いたために止むを得ず朝廷に願出てその甥ペンデンに職を  
 譲ったことになる。尤もこのような請願は正統六年に既に  
 行われていた。實錄正統六年四月辛卯にナムカに與えられ  
 た勅に(史料一四六頁)。

今爾遣永隆監藏、鎖南端竹前來朝貢、并奏、見今年老  
 欲令長子班丹監倒嗣封贊善王、次子巴思恭藏ト爲都指揮。

とあるのがそれで、英宗はこのときは許可せず、ペンデン  
 を都指揮使として父に代って本都司のことを司らしめ、巴  
 思恭藏トを指揮僉事となして兄を助けしめるに止めた。

この文に出てくる永隆監藏 yŋ lyŋ tci'en tsang は G-yuñ  
 druñ rgyal mtshan' 鎖南端竹 suo nam tu'en tsy' は  
 Bsod nam don grub' 巴思恭藏ト pa sl' kuŋ tsang pu は  
 Dpal skyon bzai po' と還元されるが、注意すべきはペン  
 デンが長子とあるに拘らず、正統十年の詔では姪になっ  
 ていることである。今この何れが正しいかは直に明にする

ことはできないが、恐らくは姪が正しいのであろう。尤も  
 この頃一部の貴族の間にも行われていた一妻多夫制の一例  
 とすれば、それは子でもあり同時に姪でもあるから何れも  
 正しいことになる。とにかく王の交代は明傳に全く觸れて  
 いないに拘らず正統十年に行われたとしなければならぬ  
 のである。

成化三年(一四六七)にペンデンの後に王統を繼いだの  
 は塔兒巴堅察 t'a zI pa tsien ts'an であるが(史料二四  
 五頁)、明かに Thar pa rgyal mtshan と還元される。ケ  
 ーペーガトンは第七代カルマパ・チョエラギャムツォの傳  
 のうちに(PT. p. 554)。

豚の年(丁亥、一四六七)の新年を濟ませ、リンツァン  
 の贊善王タンバギェンツェン Tsan cin dban Than pa  
 rgyal mtshan は居館 Gser Khan に〔彼を〕請導し、  
 多くの贈物を獻げたり。

というが、この年は封爵の命の出た年であり、タルバの實  
 際の襲職はそれより少しく遡るとしなければならぬ。  
 スタン氏もこの史料は既に引用しているが、テキストの  
 Than pa は、氏のいうごとく Thar pa を正しいものと

しなければならぬと思う (REB. p. 214)。

ついで實錄成化十二年八月戊寅の條には、「贊善王班丹堅千」が遣使來朝したことをいうが (史料二七一頁)、『班丹堅千 puan tan tsien tsien は Dpal ldan rgyal mtshan であろう。このラマの名はこの個所にしか現れず、従つて在職の年次も亦定めがたい。その故か明傳には彼の名は全く記されていない。

而して同じく十八年閏八月辛卯の條には、喃葛堅察巴藏ト nam ko tsien ts'an pa tsang pu が贊善王に封ぜられたことをいう (史料二八七頁)。明かに Nam mkhah rgyal mtshan dpal bzah po であるが、彼の在職は凡そ弘治十六年までである。

ついで弟の端竹堅督が弘治十六年九月に番僧の阿完を遣して襲職を請うた。端竹堅督 tuen tsy tsien tsam は Don grub rgyal mtshan、阿完 o uen は Nag dbah と考えられるが、在職は嘉靖二十二年 (一五四三) その甥の端岳堅督が後を繼ぐまで續く (史料三八九頁)。端岳堅督 tuen io tsien tsam は當然 Don yod rgyal mtshan と還元すべきである。

贊善王とその他の諸派の關係、又はリンツァンの一般の狀態に關してはスタン氏が詳細な研究を發表しており (REB. p. 211) 我々がそれに附加し得るものは殆どない。唯實錄によつて、贊善王には若干の異同があることをここに記して參考に供した次第である。

## 一五

第七は護教王であるが、明傳には、

護教王者宗巴幹即南哥巴藏ト館覺僧也。

と述べている。宗巴 tsung pa は恐らく「高貴なる(もの)」<sup>①</sup>「高僧」の意味をもつ bsun pa を寫したもので、幹即南哥巴藏トは實錄にはすべて幹即南哥巴藏ト no tci nam ko pa tsang pu とあるから Hrod zer nam mkhah dpal bzah po を寫したものである。館覺 kuoen t'au<sup>②</sup> は從來何人にも解き得ない名稱であつたが、ケーバーガトンにはやはりデシンの奏請による教王の封爵の一つとしてゴンジヨ Gon gyo を擧げており (PT. p. 522. 元末明初五五二頁)。<sup>③</sup>更に Gon gyo Hu kyahu wan (護教王) ともつてゐるから (PT. p. 524) Gon gyo 又は Go hjo (REB.

p. 223) であることは疑ない。而してその位置はスタン氏が示しているごとくデルゲの西南、チャムドの東北東に當る地點である (REB. Carte du Tibet oriental)。

この派が如何なる宗派に屬するかも從來頗る難解な問題であつたが、ニャンチュンによれば、やはりサキャバのナンチュンの一人にゴンジョの系統が擧げられているから (IT. IV, p. 83) スタン氏同様これをサキャバの一派と見なしておきたう (REB. p. 238, n. 10)。

ゴンジョはリンツァンとも近く、同じ宗派であるから相互の聯絡も密接に行われたのであらう。前述の永樂四年二月に來朝した使臣ドエンルブサンポは「館覺靈藏等處使臣」と呼ばれて兩大ラマの使者を兼ねている (八〇頁)。而して翌三月にはリンツァンの大ラマと同時にオエセルナムカベルサンポは館覺灌頂大國師を命ぜられた (史料五二頁)。翌五年二月にはオエセルは割思巴兒監藏 tsa gi pa z1 tchien tsag Grags pa rgyal mtshan を使者として貢馬したが (史料五四頁)、明傳は「遣使入謝」というから謝恩の意味での入朝であることはまちがいない。續いて三月丁卯には護教王に封ぜられたが、その事情はリンツァン

をはじめ併記されている諸王の場合と同様であらう。

オエセルナムカは永樂十三年頃に歿し、その後は甥の幹些兒吉刺思巴藏卜が護教王となる。明傳にはオエセルナムカが十二年に歿したことをいうが、實錄には對應記事はない。しかし十三年にその甥が護教王になったことは實錄同年五月丙辰の記事によって明かである (史料六五頁)。幹些兒吉刺思巴藏卜は實錄宣德四年四月初の條には幹些兒吉刺思巴八藏卜 \*uo sie z1 tci \*ja i1 pa pa tsag pu とあるが、後者の綴字が正しく、Hod zer grags pa dpal bzang po と考えられるものである。

護教王の事蹟は宣德四年四月のオエセルラグパの遣使入貢を以て終り、その後は絶えて史上には現れない。明傳はオエセルラグパについて、

洪熙宣德中、並入貢、已而卒、無嗣、其爵遂絕。

といつて、これを以て護教王の系統が斷絶したことを明かにしている。

さて第八は輔教王である。この王に關して明傳には、  
輔教王者思達藏僧也、其地視烏斯藏尤遠。

とある。この思達藏 si ta tsag の地が何れにあるかが又

頗る難問で、從來何人もこれを解いたものはなかった。唯トウッチ氏が初めて明傳の五教主を紹介したときに、輔教王をタグツァン Stag tshan の僧であると述べ (TPS, p. 25)、又次のことへんう (TPS, p. 92)。

私はタグツァンを判定するのに充分なデータを缺いている。しかしもしラダクのヘミ Hemi の創設者が同じ派に属するものとすれば、彼等はカーギュパの一派と考えられる。

トウッチ氏についてフェリリ女史 A. Ferrari はキエンツエの案内書により、オンブウのタグツァン Hon bu stag tshan なる地名を搜出し、それはカーギュパの一派タグツァン Stag tshan pa の中心で、一時隆盛を極めたが、現在では何等その存在は知られず、恐らく滅びたのではないといっている (GHP, p. 120)。

フェリリ女史のいうオンブウのタグツァンは女史の示した地圖の上ではデンサテルの北北西に當るが、それは果して明傳のいう思達藏であろうか。明傳に、「その地は烏思藏に視て尤も遠い」というからには、常識的にはラサより西方、恐らくはサキャよりも尚遠くの地にその存在を求

めなければならない。そのようなことを念頭に置いて我々はトウッチ氏の示すサキャバの系圖を見ると、ドゥエチヨエ系の開祖クンガーレグバージュンネーギエンツェンベルサンボ Kun dgañ legs pañi hbyuñ gnas rgyal mtshan dpal bzai po の子にタグツァンメン Stag tshan rdson に生れたラグバギエンツェン Grags pa rgyal mtshan (二三六一三七八)なる人物を発見する (TPS, Genealogical Tables)。しかし彼の子孫がドゥエチヨエ系としてその後繁榮するのであるから、これがタグツァンバ等であるはずはない。しかし更に進むと彼の曾孫のワン・ナムカレグバーギエンツェン Dbañ Nam mkhañ legs pañi rgyal mtshan は大明王 Ta miñ rgyal po から一四一五年に Kya ho wan の稱號を與えられたという。トウッチ氏は Kya ho wan 即ち Chao wang (教主) であるというが、それは多分 Ho kyaho wan の誤で、これこそ正に輔教王そのものでなければなるまい。

尤も元代にも既にタグツァンバはモンゴルの朝廷に出入していた。ウラン史を見ると、トガンテムル(順帝)が帝位を棄てたとき「タグツァンバのパーリ・クンガーリンチ

「*Stag tshan pa Dpah ri Kun dgah rin chen*」なるものが大都にいたことが記されている (RA. p. 15a)。この記事は決して本来ウラン史にあったものでなく、後からの附加であることは明かであり、クンガーリンチュンがドウェチョエの家に属するものでないことも確であるが、この系統のものが元朝と聯絡あったことの一つの證據にはなるであろう。

ついで明代に入るとタグツァンパの最初の入貢者は洪武六年十月の國公哥列思監藏巴藏トで、それが右に述べたラグバギエンツェンであろうことは前に述べた(元末明初五三一頁)。しかし明確にタグツァンパとして明代の歴史に現れてくるのは、永樂十一年五月丙戌に「思達藏輔教王」に任ぜられた南渴烈思巴を以て最初とする(史料六三頁)。「南渴烈思巴」*nam k'o lis pa* はいうまでもなく右に述べたナムカレグベギエンツェンで、彼が一四一五年(永樂十三年)に輔教王に任ぜられたというのは、正に永樂十一年に發せられた封爵を二年後に受取ったことを意味するものに外ならない。永樂十一年二月には前にチベットに派遣された中官楊三保が歸還したばかりであり、恐らく

彼の齎した情報がこの封爵授與を決定せしめたのであらう。尚参考のためその系圖をトゥッチ氏の研究から必要な部分だけ轉載すると次頁の「第四表」のごとくなる。

ナムカレグバの遣使は二度程で終っており、ついで現れるのは實錄景泰七年夏四月庚戌の條の「四川烏思藏達滄輔教等王喃恰勒巴羅骨堅千伯」の遣使來朝である(史料二〇六頁)。達滄 *ta ts'ang* は *Stag tshan* であり、王名喃恰勒巴羅骨堅千伯 *nam tē'a luei pa luo ku tšien ts'ien pai* は *Nam mkhah legs pa hi blo gros rgyal mshan pa* と還元されるが、これが南渴烈思巴と同一人であることは疑ない。同じく六月癸丑の條に胡濙の奏によるとして(史料二〇六頁)。

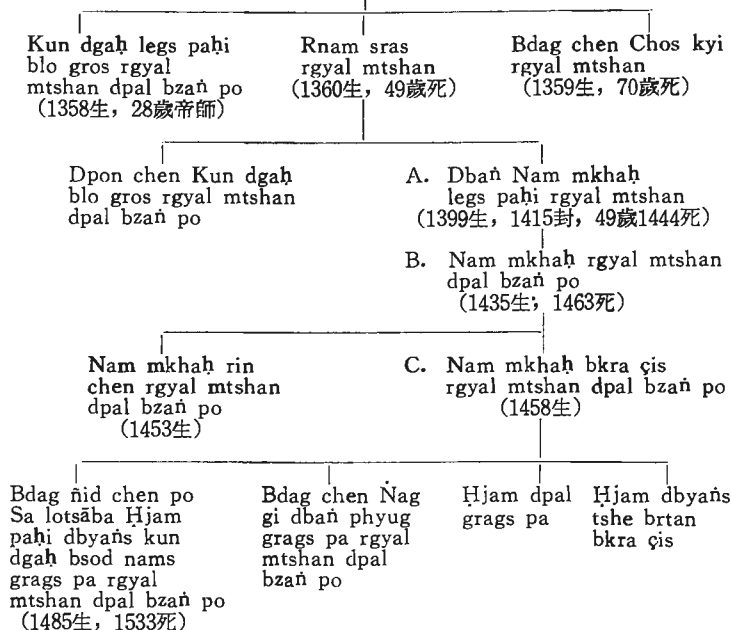
封蒼蒼地面王子喃葛堅桑巴藏ト、襲爲輔教王。

とあるが、この蒼蒼 *ta ts'ang* もタグツァンであり、喃葛堅桑巴藏ト *nam ko tšien ts'an pa tsang pu* は明かに *Nam mkhah rgyal mshan dpal bzang po* であろう。實錄はその翌年天順元年九月辛巳の條に更に(史料二二二頁)。

遣正使灌頂國師葛藏、副使右覺義桑加巴等齎勅語并綵幣

## 〔第四表〕

## Grags pa rgyal mtshan



僧俗衣帽鈴杵等物、封蒼蒼喃葛堅巴藏卜、襲爲輔教王、  
以其父喃葛列思巴羅竹堅巴藏卜奏年老不能視事故也。

とあつて、この断片的な記事の間の事情を説明している。

王子の名は系圖のナムカギエンツェンペルサンボに一致しているが、唯父のナムカレグバは四十六歳で一四四四年に歿したことになっており、これでは景泰七年（一四五六）又は天順元年までは生存していないことになる。しかし年老いて止むを得ず職を子に譲ったというからには四十六歳で死亡した筈はない。トゥッチ氏の系圖の方に何らかの誤があるであろう。

ナムカギエンツェンに次いで立ったのはその子のC、ナムカタシーギエンツェンペルサンボ Nam mkhaḥ bkra çis rgyal mtshan dpal bzañ po である。即ち實錄成化五年正月辛巳の條には、闡化王、闡教王とともに輔教王南葛堅巴藏卜の子「葛剌失堅參叭藏卜」ko tea ši tñen ts'am \*pa tsat pu を封じたことをいうが（史料二五三頁）、明傳を對照すれば後者の名は最初に喃字を脱落している。父のナムカギエンツェンは一四六三年に歿しており、一四六九年（成化五年）の封爵授與

は時期的にもよく吻合する。尚同じく成化十五年正月甲戌の條には輔教王の南渴堅祭巴藏ト *nam ko tseu ts'an pa ts'ang pa* が遣使來朝したことをいうが、この王は前代のB、ナムカギエンツェンではなく、C、ナムカタシーギエンツェンであり、タシーの漢字音譯を缺いた形と見なすべきである。

輔教王の遣使入貢は嘉靖時代まで斷續的に行われるが、その王名はC以後は全く記されず、漢文獻の上での系統追求は不可能になる。しかし右の檢討によつて輔教王がサキヤパのドウエチヨエ系であり、タグツァンパとは彼等を指すものであることは確實に證明できたと思う。

以上長々と八大教王の系統年代を檢討したが、これを表記すると次のごとくなる。

大寶法王	カルマバ
大乘法王	サキヤバ・ラカン系
大慈法王	ゲルグバ
闡化王	バグモドゥバ
贊善王	リンツァンバ

護教王      サキヤバ

闡教王      リゴンバ

輔教王      タグツァンバ

右のうちカルマバ、バグモドゥバ、リゴンバはカーギユバの分派であり、タグツァンバ、リンツァンバはサキヤパの分派である。即ちカーギユバは三人の教王を出しているが、サキヤバは四人の法王を出している。結局分派はしているが、これが明代の各宗派の大勢であるとすれば、やはりサキヤパの勢力は尚宗教上は元代に劣らず相當なものであったことは否めない。分割統治とはいふもののサキヤパの勢力は依然としてチベット各地に根強く擴がつていたのである。

又最初の三大法王はその勢力範圍を各々東チベット、中央チベット、西チベットに持っている。明朝はその三大地域における最大の宗派が何であるかは夙に熟知していたのである。三大法王を設定し、その間の小空間に五人の教王を配置したのは、當時のチベットの現實からして實情を全くよく把握した施策といわざるを得ない。而してこれらの諸教王の封爵が殆ど永樂時代に行われたのを知るとき、我



我は更めて成祖の對チベット政策が如何に適確に行われたかという點に感嘆の念を禁じ得ないのである。〔完〕

〔註〕

- ① 第四代シャルバの極めて簡単な傳記はリチャードスン氏によつて發表されている (KS, I, p. 150)。
- ② 佐藤長「明代チベットのリゴンバ派の系統について」東洋學報四五卷第四號。
- ③ テキストには *Hjin rten mgon po* とあるが、*hjin* は *hjiig* の誤と見なす。
- ④ テンミンでは *Gtsah shig*。
- ⑤ 前掲論文一七頁の第五表を参照されたい。
- ⑥ Woodville W. Rockhill, *Land of Lamas*, New York, 1891, p. 351.
- ⑦ 實錄宣德元年三月己亥の條には「靈藏贊善王子鎖南監藏」等がラマの領占扎思巴を遣して馬を買したことが記されているが

(史料七七頁)、『鎖南監藏 *tsuen nam tsien tsag* は *Bsod nam rgyal mshan*、領占扎思巴 *lig tshen tsa st pa* は *Rim chen brags pa* であろう。順序からいえば、このソエナムギェンツェンは前年に王の襲職を命ぜられたナムカギェンツェンの子に見えるであろうが、實錄にはこのとき未だ贊善王としてのナムカの名は現れていないので、ラグバベルサンポの子と見たい。ナムカの長子、次子は後に述べるが、ともにソエナムギェンツェンではないことが一つの傍證となる(八一頁参照)。

⑧ *bsun pa* はバーリッヒ氏によれば、獨身の僧侶を意味するところ (BA, p. 306)。

⑨ 館覺は管覺 *kuen tsau* と書かれる。實錄永樂十一年二月己未及び十二年正月己卯の條に、「管覺灌頂國師護教王」とあり(史料六三、六四頁)、同じく宣德四年四月の條に「管覺護教王」とある(史料九九頁)。

⑩ ダス氏によればラサの西方の山中に *Siag tshan ra ba stod* という有名な庵があるというが (TED, p. 548)、『恐らく同一の場所ではあるまい。